

『太宰府小史』と三人の歴史家―竹岡勝也・長沼賢海・橋詰武生―

1952年(昭和27年)4月、太宰府天満宮の御神忌一千五十年大祭の記念事業として『太宰府小史』が刊行されました(1980年復刻)。西高辻信貞前宮司による序文には、終戦を境に激変する社会の中、一千五十年大祭を期に、太宰府と太宰府天満宮の歴史の意義を位置付け直し、将来に継承していく、という意気込みが窺えます。執筆陣は竹岡勝也、長沼賢海、橋詰武生の三氏。いずれも戦後太宰府の文化運動に多大な貢献のあった人物です。

第一編「上代の太宰府」は、当時北海道大学教授であった竹岡勝也によるもの。彼は1929年(昭和4年)に九州帝国大学教授となり国史学の講座を担当(1946年3月退官)、1945年6月の福岡空襲で住居を失い、その後しばらく太宰府の西高辻邸で暮らすことになりましたが、その間、信貞前宮司をはじめ太宰府の若者たちと親密な学問的交流をもちました。

第二編「中世の太宰府」の執筆は、宗教史・海事史の分野で先駆的な研究を成した長沼賢海。彼は1924年(大正13年)九州帝大法文学部国史学科の初代教授に着任しますが、長らく太宰府に住み、1968年(昭和43年)には85歳で『耶馬台と太宰府』を著しています。

第三編「史伝と史話」を書いた橋詰武生は福岡市対馬小路の生まれ。20代の頃から地元の考古学に強い関

太宰府人物志

資料室だより ⑦

心をもち九州の文化研究に没頭、郷土史家として独自の地位を築きます。ところで『太宰府小史』中、橋詰武生は「前書き」でユーモアあふれるエピソードを紹介しています。ある秋の晴れた日、橋詰はバス中でピジネスマンの会話を耳にします。一人は「半白」の頭髪を持ち、もう一人は「半光」の頭。宝満山を指して半光氏「あの山、なに山だツか」。答えて半白氏「アレは天拝山デス、あの山の麓イ天神さんをお祀りした太宰府のお宮がアリマス」。半光氏「さヨか、太宰府云ウンは、昔、九州の政府がおましたんや聞いてまんが、あツこにおましたんかいな」。橋詰は、「このトンチンカンな会話に名残を惜しみながら」関屋で降車し、大宰府政庁跡の礎石の上に佇み、しばらく黙考します。

「一体太宰府はどツちが本当か」

ここで橋詰が言いたいのは、もちろん二人の知識程度うんぬんではありません。また、現在の太宰府のルーツは政庁か天満宮かということでもない、実はこの時彼の心を捉えたのは、古くは政庁所在地として栄え、後に天満宮を中心として門前町が形成され発展する、太宰府の歴史そのものだったのです。この小話は『太宰府小史』の全体の構成を、はからずも巧みに表現した部分と言えます。